様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４５１３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７３０７１３

研究課題名（和文）幼児期の多文化・異文化経験や知識が認知に及ぼす影響の解明―選択的信頼に着目して―

研究課題名（英文）Effects of foreign and multicultural experiences on cognition: focusing on selective trust

研究代表者
久津木　文（Kutsuki, Aya）

神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・准教授

研究者番号：９０５８１２３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：異文化に対する感受性や外国語や外国人に対する期待や信頼は幼児期から児童期初期に大きく変化すると考えられるが,日本の幼児についてはほとんど調べられてきていなかった.比較的外国との接触が少ない通常の日本の保育園・幼稚園に通う幼児,国際学校に通う幼児や児童を対象に,外国語に対する意識や,外国語を話す対象に対しての信頼をインタビュー及び実験的手法を用いて調べた.総合的な結果としては,この時期,外国要素に対する寛容性は年齢とともに高まる傾向があるということ,そして,より外国要素の知識や家庭の教育や海外滞在経験等のある子どものほうがより異文化から来た人物の能力をよりフェアな評価をすることが判明した.

研究成果の概要（英文）：This study focused on selective trust in Japanese preschoolers who were relatively less exposed to foreign cultures and pepople compared to those living in other countries where previous studies were conducted. Children's selectivity in their trust towards native and foreign language speakers were sought using interviews and experimental methods. While in previous studies conducted in other countries, children showed a tendency to treat pepole with foreign accents nagatively, such tendency was not found in the present study.
Through various studies, a general tendency was found that children's allowances for foreign poeple develop over preschool years and greater exposure to foregin elements such as staying abroad, being good at a foregin language, etc. conttributes towards more realistic views of foreign people and foreign languages.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児　異文化間教育　選択的信頼　異文化に対する感受性　認知

１．研究開始当初の背景

これまでの海外で行われた先行研究から子供は１～３歳といったきわめて幼い時期から性差や肌の色などの人の違いを様々なレベルで認識しはじめていることがわかっている．その一方,乳児期の子どもの知識や能力は可塑性が高く周囲からの教育や働きかけで変化する可能性を秘めていることも同時に指摘されている．しかし**幼児期の異文化接触に関する研究の多くでは個々の子どもの人間形成の事象であったりそこで見られる異文化摩擦による問題が過度に注目されてきた**傾向がある．さらには早期の異文化・多文化（異・多文化）への接触が子どもの発達に与える影響ついてのものはエピソードや事例研究といった質的なアプローチが主であり,そこで述べられている影響も仮説の域を出ていない.さらには多文化経験が幼児期の子どもの認知一般に与える影響に着目しているもので,国内で行われたものは殆どないといっても過言ではない．しかしながら言語教育的及び発達的な関心から幼児期の言葉の発達については比較的多くの研究が行われている．多言語環境で育つ子どもは早くから二つの言語の違いや誰がどの言葉を話しているのかといった言語的情報に敏感であることや,だまし絵の解釈や心の理論の得点といった言語以外の認知領域でもモノリンガルより優れていることがわかりつつある．ところが,これらの研究ではバイリンガルであるという言語的な側面ばかりが強調されてしまっている．二つの言語が話せなくとも充分に二つの異なる文化や情報を得て育っている子どもは沢山いるはずであるし,実際日本のような言語環境下では二言語を“話せない”バイカルチャーな子どもは多い．そこで本研究では幼児がバイリンガルであるかどうかということよりも,**幼児自身の自分とは違う文化や言語といったものに対する気づき,つまりは多文化・異文化経験の程度と認知の関係に着目**する．さらに,認知のばかでも本研究では**「選択的信頼」や文化的逸脱に対する寛容性**に着目した．

２．研究の目的

幼児を対象にして異・多文化接触の経験や知識を捉えつつ選択的信頼実験や文化的逸脱行為に対する反応を比較することで**異・多文化接触の経験や知識が幼児期の認知に与える影響を量的に明らかにすること**であった.

３．研究の方法

課題全体は複数の実験及び調査によって構成され,対象や課題の内容が異なる.それらをテーマ別に大別すると以下のようになる.

（１）他文化や外国語に対する気づきとそれに対する価値観の関係

（２）文化的逸脱行為（他文化的行為）に対する寛容性

（３）他文化に所属する人物の知識に対する期待

（１）他文化や外国語に対する気づきとそれに対する価値観の関係

このテーマは後に続く,２）や３）の実験や調査の前提となる「外国語を話す他の国から来た人物」について幼児期の子どもの理解や期待を調べた基礎的な調査である.

＜目的＞国内の特に英語を含めた多文化教育を行っていない通常の保育園に通う幼児を対象に，初期の異文化理解としての日本や外国といった国や英語についての知識の発達的変化を調べることであった.

＜参加者＞通常の日本人対象の幼稚園児.

4 歳クラス（N＝21 人）．5 歳クラス（N＝24 人）.

＜方法＞日本と外国，そして，英語の理解についての価値観を質問し,記録シートに記録した．調査実施前から子どもの反応がある程度予想できた項目に関しては，記録シートに選択肢を用意し，自由な回答を求めたものに関しては，可能な限り要点をまとめて記述のかたちで残した.自由回答の部分については内容を基に分類を行った．さらに，量的変数として次の二つを算出して後の分析に使用した（国理解得点：1~5 の項目の合計点＆英語理解得点：6~9 の項目の合計点）.

（２）文化的逸脱行為（他文化的行為）に対する寛容性

＜目的＞文化的逸脱行為に対しての寛容性の発達変化及び異文化経験の影響を調べる.

＜参加者＞国際学校（小学校）の児童全学年（1 年生～6 年生(166 名)）.

＜方法＞質問紙法で実施.異文化理解(異文化に対する寛容性)に関する質問項目を全てに回答したもののみ.質問紙;異文化に対する寛容性を調べるための項目として外国人と日本人が日本の文化的タブーとされる行為(土足で家に上がる＆豆腐を残してしまう)を行った場合を想定した質問を 4 問用意し,児童にその人物が悪いかどうかを 5「とても悪い」～１「まったく悪くない」から選択して回答するよう求めた．これ以外に児童用の質問紙には日本語・外国語使用についてのものや,海外経験について尋ねたものが含まれていた．同様に,保護者のものには子どもの言語使用・海外経験のみならず保護者本人の海外経験や言語使用,そして,自文化・他文化を子どもに教えたい程度とその方法を尋ねた項目が存在し,その総合スコアを“文化伝承スコア”として分析に用いた.

（３）他文化に所属する人物の知識に対する期待（選択的信頼）

本テーマは外国から来た人物に対する信頼が幼児期の多文化経験によって異なるかど

うかを実証的に調べたものであった.
通常の日本人保育所等に通う幼児そして異文化・多文化経験が多いと思われる国際保育所の幼児の４～６歳及び,国際学校の小学生対象に実験・調査を実施した.
① 研究１
＜目的＞外国要素の経験が少ない通常の日本の保育園に通う幼児の外国人に対する選択的信頼（期待）を調べること.
＜参加者＞4-5 歳の日本語モノリンガルの幼児(N=52).
＜方法＞外国語を話すパペットと日本語を母語とするパペットとの間にみられる選択的信頼性と判断の一般化を調べた. 二条件が設定され,日本語-日本語条件ではパペットは両方とも日本語を話し,日本語-外国語条件では片方がスペイン語を話した. どちらの条件でも一方の日本語話者のパペットがラベルを誤解するという行動をし,言語的な能力が低いことを示した. 幼児は四つの知識や特徴についてどのパペットを信頼するか判断した.
②研究 2
＜目的＞早期に形成されたバイアスがそのまま残るわけではなく成長するなかで認知的な柔軟性が経験とともに獲得されると考えられる. 本研究では, 以下のような仮説をたて検討した. １)学年があがるにつれ, 他者の言語的能力から期待するものが異なる.
２)子どもの言語に対する自信や海外滞在経験により他者の言語的能力から期待するものが異なる.
＜参加者＞対象者: 分析対象 N=174 (低学年＝71, 中学年＝66, 高学年=37).
＜方法＞調査課題：質問紙を用いてクラス毎に集団法で実施した. 質問内容は英語・日本語両言語で書かれており, 日本語にはルビを打った. 質問紙の冒頭には英語話者の女の子と日本語話者の女の子がおり母語しかわからないことが説明されていた. 二人の女の子の好みや知識について尋ねる次の四つの質問を用いた(下記あ)～お)). いずれの質問においても四つの選択肢(ハナコ(日本語話者), メアリー(英語話者), 二人とも, わからない)のなかから一つを選んで丸をつけてもらうかたちで回答を求めた. あ) テレビが好きなのはだれか(好み),い) 英単語の意味を聞く相手(英語知識),う) 日本語の単語の意味を聞く相手(日本語知識),え) 新奇事物の使い方を聞く相手(事物の知識), お) 迷子の子どもを助けるのに尋ねる相手(親切さ)子どもの海外経験等については母親版の質問紙のデータを用いた.

４．研究成果
（1）他文化や外国語に対する気づきとそれに対する価値観の関係
●異文化間教育学会にて発表（2013）
4-5 歳の間に自分の国や外国の国, そして外国語についての理解と評価に変化がある可能性が示唆された. 外国語の学習自体は,影響を与えないようであるが, 国や外国語の理解が高い子どもは外国語に対して少し成熟した見解(i.e.外国語を話すことが「かっこいいとは思わない」)をもっている可能性が示唆された.
（2）文化的逸脱行為（他文化的行為）に対する寛容性
●異文化間教育学会(2014)にて発表
総体的な寛容性の違いの分析；日本人と外国人が同じ行動をした際の相対的な評価を示すのが差異スコア(外国人に対する評価点－日本人に対する評価点)を算出したうえで分析を行った(スコアが“－”であればより日本人のほうが悪く,“＋”であればその逆であることを示す). 学年や年齢による検討を行ったが有意な差はなかった. 土足で上がる行為も豆腐を残す行為もスコアが負の値であり,日本人のほうが相対的に悪いと個人内で判断されていること,そして,相対的な判断を二つの質問間で比較すると,土足で上がる行為のほうが豆腐を残す行為よりも,さらに悪いと判断されていることを示した.
寛容性に影響する要因の検討；子ども自身の外国語・異文化経験(外国滞在経験の有無及び日本語が一番得意であるかどうか)及び母親の外国語・異文化経験(外国滞在経験の有無及び母親の異文化伝承スコア)が子どもの文化的タブーに対する寛容度(差異スコア)を予測するか重回帰分析(ステップワイズ法)を用いて検討した. その結果,全学年と,低学年を対象としたもののみに有効なモデルがみつかった. 低学年の場合は,土足で上がるといったわかりやすい文化的タブーについては母親の異文化・自文化知識を教示する行動や動機の高さに影響を受け,より外国人に対して寛容的な判断をするようである. 豆腐を残す行為については,子どもの海外経験が無い方が外国人は悪くないと判断する傾向があることを示した. 全体の分析でも,この二つの変数が豆腐の差異スコアの説明変数として残っており,母親の文化伝承スコアが高いほど日本人のほうが相対的に悪いと判断し,子どもの海外滞在経験が有るほうが外国人に対して相対的に厳しくなる,という同じ方向性の影響をもっていることが示された. これは一見複雑な結果であるが,子どもの海外滞在経験の有無により差異スコアに違いがあるかを調べたところ(二要因分散分析；差異スコア(2)×海外滞在経験(2)),差異スコアの種類による違いはなかったが,海外滞在経験が無いほうが差異スコアが大きい,つまり,外国人に寛容で日本人に厳しいことが示された. これらを踏まえると,土足で上がるという文化的タブーに関する寛容性は特に低学年において母親を含めた周囲の人々から得られる文化の違いに気が付かせるような情報によって大きな影響を受けているが,豆腐を食べるかどうかで悪いかどうかの判断は食べ物の好みであるのと,他

の変数が採用されなかったことからも,異文化経験とはあまり関係がないのかもしれない,しかし,海外経験の無い子どものほうが“型にはまった”判断をしがちであり,相対的に過剰に外国人に寛容になるという可能性が考えられる．統計的に有意ではなかったが,高学年ほど全般的に双方の差異スコアが減少する傾向を考慮すると,やはり,外国人に“だけ”にやさしいというのよりも,どんな人物であれ,さまざまな知識や経験から理解しようと試みるのが寛容性の成長であるとも考えられる．子どもや母親の外国語・異文化経験が双方の低学年でしか影響しないのはそのためかもしれない．

この発表の分析の発展させたものを国際誌に投稿し,現在,修正中(minor revision)である．近々,採択される可能性が非常に高い．

（3）他文化に所属する人物の知識に対する期待（選択的信頼）

① 研究 1:JSLS(2012) 等で発表，及びTALKS(2015)に論文として掲載

日本人幼児は外国語話者よりも日本語母語話者が言語的間違いを犯すほうをより厳しく判断すること,そして,言語的能力が他の社会的特徴や,好み等には関連しないという理解があることが示唆された．

同様の手法で国際幼稚園や国際結婚家庭で育つ幼児のデータを収集済み．現在分析中である．

② 研究 2:異文化間教育学会(2015)にて発表

国際学校のように日々外国語に接している環境の子どもであっても学年間で話者の話す言語から期待する言語能力に違いがあり,学年が上がるにつれ,その言語の話者であっても知らないかもし知れないと考える傾向が高まり，より現実的な期待をするようである．同様に,本人たちの言語得意感との関係でみた場合,日本語語彙の知識においてのみ日本語のみが得意であると答えた子どもと両言語が得意と答えた子どもで差がみられた．前者のほうがより日本語話者＝日本語を知っているという思い込みをよりしないことが判明した．実際にそれぞれの言語の能力を計測していないため解釈のみにとどまるが，国際学校で日本語のみが得意であると答える子どもは実際，日本語についての知識が高い可能性があり,そういう子どものほうが日本語話者に対してより現実的な期待するのかもしれない．海外滞在期間割合そのものは影響がないことがわかった．今回の分析ではそれぞれの要因を個別に検討したが総合的・複合的な分析がさらに必要である．通常の日本の小学校に通う子どものデータとの比較ができればより具体的に影響を捉えることができるだろう．

（4）総合的な結果のまとめ

幼児期から児童期にかけて異文化要素に対する寛容性は年齢とともに高まる傾向があるということ、そして、より外国要素の知識や家庭の教育や海外滞在経験等のある子どものほうがより異文化から来た人物の能力をよりフェアな評価をすることが判明したといえる。

（5）その他

それぞれの実験・調査課題はすべて本課題のために新規に作成されたものであり,実施によって得られた結果のみならず,作成自体やその分析方法の確立自体も成果として含めるべきであろう．

５．主な発表論文等

（研究代表者,研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①久津木文，心の理論・実行機能の観点からみた認知的・言語的柔軟性課題の検討，発達研究 29,2015,pp.165-168

②田中佑美，久津木文，イマージョン教育を受ける児童のバイリンガリズムとその規定要因，広島経済大学研究論, 37(4), 2015, pp.113-124.

③田浦秀幸,清水つかさ,乗次章子,田浦アマンダ,久津木文,日英バイリンガル園児のメタ言語発達段階解明研究:日本語モノリンガル園児との比較パイロットスタディー, Studies in Language Science Working Papers(Graduate School of Language Education and Information Scienece)4,2014,pp.1-11.

④KUTSUKI, A. Selective trust inJapanese Preschoolers between Foreign and Native Language Speakers,Theoretical and Applied Lingustics at Kobe Shoin18,2015,pp.45-52.

⑤久津木文，バイリンガルとして育つということ―二言語で生きることで起きる認知的影響―, Theoritical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS), 12, 2014,pp.47-65.

〔学会発表〕（計 10 件）

①田中佑美，久津木文，外国語・日本語話者に対する小学生がもつ期待について―国際学校における調査―,2015，異文化間教育学会第 36 回大会

②久津木文,田中佑美，国際学校における児童の日本語学習動機,2015，異文化間教育学会第 36 回大会

③久津木文,小椋たみ子，板倉昭二，幼児期初期の心の理論を予測するもの，2015,日本発達心理学会大会　第 26 回大会

④久津木文，幼児バイリンガルの名詞句の産出と理解にみられる二言語の影響,2014,第一言語としてのバイリンガリズム研究会(BiL1)(立命館大学大阪梅田キャンパス).

⑤久津木文,田中佑美，イマージョン教育における英語学習動機と異文化理解,2014，異文化間教育学会第 35 回大会

⑥久津木文,小椋たみ子,板倉昭二，個人内における心の理論課題の通過順序,2014，日本発達心理学会第２５回大会

⑦久津木文, 幼児期の日本や外国についての理解の発達 2,2013, 異文化間教育学会第 35 回大会
⑧久津木文,小椋たみ子,板倉昭二, 心の理論課題の通過の経時的変化とパターン―縦断データの分析―,2013, 日本発達心理学会第 24 回大会(明治学院大学)
⑨Kutsuki,A.,Tanaka,Y. Attitudes towards language learning and cultures,2012, JALT(Japanese Association for Language Teaching).
⑩久津木文, 日本語話者の子どもの母語話者と外国語話者に対しての選択的信頼についての検討の試み, 2013, 言語科学会 第 14 回年次国際大会.

６．研究組織
（１）研究代表者
久津木　文（KUTSUKI, Aya）
神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・
准教授
研究者番号：90581231